

目次

CTHイベント	1
CTHメンバーによる研究成果	3
口頭発表	3
連携パートナー	4
CTHへの訪問記録	4
「間-帝国史」とは	4
CTHについて	4
編集後記	4

CTHイベント

サミュエル・コーゲ氏に聞く

—新著 *Population Politics in the Tropics* について—

山田 智輝*

2022年6月28日、間-帝国史研究センター（Center for Transimperial History: CTH）は、‘Meet the Author Series’ と題するイベントの第1回を開催した。本イベントは、対面およびオンラインのハイブリッド形式で開催され、世界各地から約20名が参加した。第1回目となる今回のゲストに招いたのは、サミュエル・コーゲ氏であり、彼はベルリン自由大学からオンラインでの参加となった。参加者はコーゲ氏を交えて、彼の新著である *Population Politics in the Tropics: Demography, Health and Transimperialism in Colonial Angola* (Cambridge University Press, 2022) について議論をおこなった。同書は、1890年から1945年までのポルトガル領アンゴラにおいて、人口減少をめぐる懸念が

どのように生じ、いかに広がりつづけたのか、またそうした懸念が、アフリカの原住民人口を把握・維持したり増加させたり、彼らを「向上」させたりするのを目的とする、医療と空間をめぐる諸政策とどれほど密接にかかわっていたのかを検討している。同書は、その書名が示しているように、アンゴラにおいてポルトガルのおこなった人口をめぐるポリティクスが、アフリカでの他帝国の植民地主義を明確に意識した「間-帝国的な」側面を有していたことを明らかにしている。それゆえにCTHは、パートナー提携を結んでいる、ドイツを拠点とした研究フォーラム Transimperial History Blog の一員であるコーゲ氏を、今回のゲストに招聘したのである。



本イベントでは、まずコーゲ氏自身が報告をおこない、同書の中心となる議論を要約した。第一に同氏が説明したのは、植民地アンゴラでは19世紀後半に「人口減少」という考えが広まっていき、ほかのアフリカ各地の植民地と同様に1940年代まで、さらにはそれ以後も、そうした考えが根強かった点である。彼によれば、人口減少にたいしてポルトガルの抱いた不安は、1890年代後半にアンゴラで風土病たる眠り病が流行したことがきっかけとなって生じ

たという。こうした不安は、数多くの報告書で繰り返し表明された。それらの報告書での焦点は、蔓延する風土病による死亡率から、人口減少を引き起こしていると考えられる要因、すなわち、さまざまな風土病、出生率の問題、植民地の境界をまたぐ移民へと移っていった。コーゲ氏の指摘するように、人口減少をめぐる懸念は、1945年から1975年にかけてある程度は和らいだが、依然として根深いものであった。アフリカやアジアの多くの他地域とは異なり、人口減少にたいする懸念が、人口過剰にたいするそれにとって代わられることはなかった。

第二に、植民地をめぐる知の産出、循環、展開において、人口学がはたした両義的な役割を、コーゲ氏は明らかにした。同氏が論ずるところによれば、人口にかんする言説と諸政策は、人口登録や医師がおこなう問診などをつうじて、どのような、あるいはどれほど、人口についてのデータが得られるかに不可避的に左右された。人口学的な裏付けの不足や粗雑さにもかかわらず、帝国の統治者側は、得られたわずかなデータを自身の都合によりように利用することで、人口減少の脅威をしばしば誇張した。人口をめぐる知のこうした利用ないし悪用をつうじてこそ、20世紀前半のポルトガル帝国における人口減少にかんする言説がかたちづくられていったのである。

第三にコーゲ氏が述べたのは、帝国の統治者側のいう人口減少の流れを食い止めるために、彼らが打ち出したり実行に移したりした、さまざまな政策についてである。それはたとえば、眠り病への対処、予防的医学の導入、乳幼児死亡率の低下と妊産婦の健康増進を目的とする取り組み、植民地の境界

を越えた移民を取り締まろうとする試み、などである。報告者によれば、こうした諸政策にかんして、さまざまな人びとや集団が推進したり実行したり受容したり、さらには異議を唱えたりしたが、そうした者にはポルトガル人やアフリカ人のみならず、他帝国のヨーロッパ人もふくまれていた。

そして最後にコーゲ氏が説明したのは、人口減少をめぐるこうした政策や議論が、ポルトガル帝国の内部だけでなく、アフリカに植民地を有するほかのヨーロッパ帝国と

議論の多くは、ポルトガルによるアンゴラの植民地支配という事例において、諸帝国間の相互影響的な関係が、植民地支配にまつわる知の産出や循環にたいし、いかに影響をおよぼしたのか、との問題を中心に展開された。[……] コーゲ氏の先駆的な研究はもちろんのこと、そこで交わされた踏み込んだ議論は、間-帝国史という、歴史学における新たな研究分野をさらに発展させていくために必要な思索の材料となるにちがいない。

の密接な相互関係をつうじて展開されたという点である。ポルトガルの植民地支配下にあるアンゴラの状況は、ドイツやフランス、イギリスの医師たちの大きな注目を集めた。それと同時に、こうした他帝国の専門家たちの知識や経験を、ポルトガル帝国の統治者たちは当てにすることが多かった。コーゲ氏の論じるように、さまざまな植民地帝国の統治者たちは、おたがいを比較しあっていた。彼らはしばしば協力しあい、関連する情報や実践を共有した。その一方で、自帝国の植民地主義が他帝国のそれよりもすぐれていると

主張することも多かった。報告者は、そうした相互関係が、長年それぞれの帝国や植民地を個別にあつかう傾向にあった歴史家たちには明らかにされてこなかったような事象や知に結びついていったことを示したのである。

このような報告につづいて、コーゲ氏と参加者は、同氏の示唆に富む研究について活発な議論を交わした。とりわけ、同書が「間-帝国」という考えかたをめぐるものであるため、議論の多くは、ポルトガルによるアンゴラの植民地支配という事例において、諸帝国間の相互影響的な関係が、植民地支配

にまつわる知の産出や循環にたいし、いかに影響をおよぼしたのか、との問題を中心に展開された。さらに、間-帝国史的なアプローチが、どの程度、そしてどのようにして、コーゲ氏の研究デザインを規定したのかについて、また、「間-帝国 (transimperial)」と「帝国間 (interimperial)」という似て非なるふたつの用語が使われていることについても、質問がなされた。コーゲ氏の先駆的な研究はもちろんのこと、そこで交わされた踏み込んだ議論は、間-帝国史という、歴史学における新たな研究分野をさらに発展させていくために必要な思索の材料となるにちがいない。

Meet the Author Series — CTH

The
Population Politics in the Tropics: Demography, Health and Transimperialism in Colonial Angola
(Cambridge University Press, 2022)

Date:
**13:00–14:00 (Berlin time),
Tuesday 28 June 2022**

Where:
Zoom
(Registration required. Click on the QR code below)

Description:
Population Politics in the Tropics explores colonial population policies in Angola between 1810 and 1945 from a transimperial perspective. Using a wide array of previously unused sources and multilingual archival research, Samuel Coghe sheds new light on the history of colonial Angola, showing how population policies were conceived, implemented and contested. He analyses why, how and with what effects doctors, missionaries, missionaries and other colonial actors tried to grasp and quantify demographic change and 'improve' the health conditions, reproductive regimes and migration patterns of Angola's 'native' population. Coghe argues that these interventions were inextricably linked to pervasive fears of depopulation and underpopulation, but also shaped by processes of inter-imperial competition, borrowing and competition. In doing so, his fresh analysis of demography, health and migration in colonial Angola also challenges common ideas of Portuguese colonial exceptionalism.

Author:
Samuel Coghe is a Postdoctoral Research Fellow of the German Research Foundation at the Global History Department of the Free University of Berlin. Prior to that, he was a Postdoctoral Fellow at the University of Gießen and the Max Planck Institute for the History of Science and an Interim Professor of African History at Humboldt University Berlin. Coghe has extensively worked on the history of colonial rule in nineteenth- and twentieth-century Angola. His historical research has explored the relationship between colonialism and science (especially medicine, demography and veterinary science) in Lusophone and Francophone Africa, employing transimperial and global approaches. His current research deals with the commodification of coffee in colonial Africa with attention to economic, environmental and commodity history.

コーゲ氏の新著 *Population Politics in the Tropics* の射程は、アンゴラについてだけにとどまらない。アンゴラと、ポルトガル帝国や他帝国におけるほかのアフリカ各地の植民地との関係性に力点をおいた同書は、間-帝国史的な視点を採り入れることによって植民地史を新たな方法で描いた好例として読めるだろう。同書は、ポルトガル帝国を他

帝国との関係性のなかに適切に位置づけているため、今日もなお歴史叙述において広くみられると著者が指摘する見解、すなわち、肯定的にせよ否定的にせよ、ポルトガル帝国は「例外的」であったという還元主義的な見方にたいして、説得力をもって異を唱えている。

*京都大学大学院・博士課程、CTH嘱託研究員（※所属は原著執筆時。現在、バーミンガム大学大学院・博士課程在籍）

CTHメンバーによる研究成果

2022年5月

役重善洋「入植型植民地主義とユートピア——賀川豊彦と「満洲国」」『福音と世界』第77巻第5号、24–29頁。

Nadin Heé, 'Transimperial Opportunities? Transcending the Nation in Imperial Formations', *Comparativ*, vol. 31, no. 5–6, 2022, pp. 631–639.

2022年6月

東栄一郎『帝国のフロンティアをもとめて——日本人の環太平洋移動と入植者植民地主義』飯島真里子・今野裕子・佐原彩子・佃陽子訳、名古屋大学出版会、2022年。[原著: *In Search of Our Frontier: Japanese America and Settler Colonialism in the Construction of Japan's Borderless Empire* (University of California Press, 2019)]

口頭発表

ナディン・ヘーおよびダニエル・ヘディンガーは、2022年5月12日から14日にかけてスイスのジュネーヴ国際開発高等研究所 (Graduate Institute of

Geneva) で開催された、‘Modern Transimperial and Interimperial Histories: Forms, Questions, Prospects’ と題する Pierre du Bois Annual Conference 2022 に報告者として参加した。同カンファレンスにて、ヘーが ‘Materiality, Space, and Time in Transimperial Histories’ という題の発表を、ヘディングが ‘The Second World War: A Transimperial History?’ と題する報告を、それぞれ12日と13日におこなった。このカンファレンスの開催記録は、[こちら](#)で閲覧可能である。

れらを事後的に突き合わせて比較するのではない。間-帝国史が焦点をあてるのは、帝国の統治者側と被統治者側の双方が、協力と競合という複雑で可変的な関係のなかで、比較をおこなっていたということである。間-帝国史は、植民地主義ないし反植民地主義にまつわる知が帝国の境界を越えて循環したことや、ヒトやモノのグローバルな流れなど、多岐にわたる間-帝國的な事象に着目することにより、相互作用的な歴史上の諸関係が異なる帝国のあいだで展開されてきた、数々の事例を前景化するのである。

連携パートナー

- Transimperial History Blog: Critical Histories of Empire (詳細は[こちら](#)を参照)
- The Working Group on Trans/Anti-Imperialism (World History Center, University of Pittsburgh)
(詳細は[こちら](#)を参照)

CTHへの訪問記録

- | | |
|------------|---------------------------------------|
| 2022年6月10日 | 吉田信氏 (南山大学 国際教養学部・教授) |
| 2022年6月23日 | 東栄一郎氏 (ペンシルベニア大学・歴史学およびアジア系アメリカ人研究教授) |

間-帝国史とは

「間-帝国史」とは、近代の諸帝国とそれへの抵抗の歴史、および、それらが現代世界に与えている影響を主題とする新たな研究分野である。間-帝国史はつねに複数の帝国を研究対象に据えるが、その目的は帝国の比較史を描くことではない。換言すれば、まず、複数の帝国を別々のものとしてあつかい、そ

CTHについて

2022年5月1日、間-帝国史研究センター (Center for Transimperial History: CTH) は、日本の京都にある同志社大学の研究センター (中核的研究拠点) のひとつとして設立された。CTHは、科学研究費プロジェクト「「間-帝国史」研究の理論と実践——開かれた研究枠組みの構築に向けて」(基盤研究(B) 2022~2026年・研究課題番号 22H00690) の一環として運営されている。

編集後記

われわれは、2022年5月1日にCTHを立ち上げることができた。設立にあたり支援してくださったすべての関係者の方々へ感謝申し上げます。

水谷智・山田智輝
(CTHニューズレター編集者)